

1. この研修に求めたものと達成感について

現在、医療の臨床現場では MRI や CT そして核医学など、それぞれのモダリティによる検査結果を総合的に診断して治療方針が決められる。私の専門分野は血管造影・IVR であるが、より良い検査を目指す上で他分野の知識も必要となる。そこで、今回のスタンフォード大学研修での目標は、最先端の研究として高磁場 MRI や分子イメージングなどの開発現場を体験し、その実用化の可能性と将来性を学ぶことであった。

残念ながら、今回の研修と私の専門分野との関わりについて勉強する機会は少なかったが、その反面、すべての講義が私にとっては新鮮で興味深いものであった。特に Moseley 先生の MRI の未来についての講義、functional MRI の開発現場の体験見学やその応用分野の広がり、そして 7.0T MRI での高分解能画像とそれに伴う様々な課題、そこで発生するアーチファクトの中に新たな発見の可能性があることなど、大変解り易く、しかも未来を研究することの面白さを知り、得るものが大きい講義であった。そして、近い将来に放射線学の中心となるであろう分子イメージングの広大な未来への可能性などは、私の想像を超える刺激的な講義内容であった。この研修により、あらためて他の専門分野を学ぶ意欲とその機会を得たと思う。

2. 研修で出会った仲間との今後の関わりについて

この研修を通して、日頃知り合う機会のない他の専門分野の人たちと仲間になることができた。皆が研究に意欲を持ち、海外での発表経験を持つ人も多く、そのような人達に出会えて自分の視野を広げる必要性を感じた。

大学病院の研究機関で働く者として、専門性を追求することは重要なことであるが、日常に忙殺され、ともすると他の専門分野のことがおろそかになってしまう現実がある。今回の研修で、MRI をはじめ各モダリティの未来の可能性や面白さを知ることができた。今後は、この知的好奇心を持って学習や研究をすることができると思う。また、研究を進める中で、疑問や質問に対して話し合うことのできる掛けがえのない仲間を得ることができた。今後は、お互いに刺激し合えるようにまずは自分を高めていきたいと思う。

3. 日本の放射線技師のあるべき理想像

日本の放射線技師の進路は、アメリカと比較して自由度が大きく、研究に進むか、あるいは医療の現場で働くのか、そしてまた専門分野に進むのか、あるいはオールラウンダーとして働くのかは、自分自身で決定することが可能であると考えられ、また、途中で進路を変えることも可能である。それ故、個人の向上心が重要となる。臨床現場からさらに上を目指し、研究の道を進むのであれば、学位取得の必要性和英語力が必須となる。私の放射線技師の理想像は、全てを兼ね備えることであるがそれは現実的では無いかもしれない。しかし、自分の理想像を高く持ち、今回の研修のように、高い向上心を持つ他の専門分野の人との交流で補えると考えられる。そして理想像に近づくために、常にアンテナを張り、視野を広く持ち、最新の情報と世の中の動きを知り、それに柔軟に対応できる知識と体力を持つことが必要であることをこの研修で学び得た。

4. 謝辞

最後に、この研修を企画して頂きました、Stanford 大学、日本放射線技術学会、GE ヘルスケアジャパンのスタッフの関係各位そして本研修会に快く送り出して頂きました川崎医科大学附属病院関係者に感謝致します。



憧れの Moseley 先生にサインして頂きました。
Lucas Center 講義室にて